ドイツ語

一　前　史

日独文化交流の始まり

日独文化交流の始まりは、一般的に、一五九六（慶長元）年、吉利支丹禁令下での、ドイツの神秘家・修練士トマス・ア・ケンピスの宗教書『コンテムツス・ムンヂ』（天草版）の刊行であるとされる。徳川幕府による、一六三五（寛永十二）年から一八五四（安政元）年までの鎖国時代、オランダ東インド会社の社員あるいは船員として来日したドイツ人はかなりの数にのぼる。その中で特に大きな足跡を残したのがケンペルとシーボルトであろう。

ケンペル（エンゲルベルト・ケンペフェル）は、一六九〇（元禄三）年、オランダ商館付医師として来日。以後二年一〇か月日本に滞在し、『日本誌』を出版した。シーボルト（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト）は、一八二三（文政六）年、オランダ商館の医師として来日。一八二九（文政十二）年に国外退去になったが、その間、最新の医学知識、科学知識などを日本人に伝えたとされる。なお、一七七四（安永三）年に前野良沢、杉田玄白によって刊行された『解体新書』の原書は、ドイツ人のJ・A・クルムス著『ターヘル・アナトミア』のオランダ語訳である。ただし、蘭学とか英学などの言葉に対して、ドイツ学という言葉は一般に広まることもなく、長い間いわば日

陰の身であった。

「独語学」の始まり

フランス語、露語は一八〇八（文化五）年に、英語は一八〇九（文化六）年に幕府よりその学習が命じられていたが、ドイツ語の学習が幕府によって始められるようになったのは、一八六〇（万延元）年十月の、プロシアの特命全権大使フリードリヒ・ツー・オイレンブルグ伯爵の来航と、これに伴う六一年一月（万延元年十二月）の日普修好通商条約の締結にそなえるためであろう。六〇年八月（万延元年七月十七日、プロシア艦隊が江戸湾に到着する二日前）、蘭学者であり、後に蕃書調所教授となった市川兼恭と加藤弘之がドイツ語修得の内命を受ける。さらに、同年九月には、正式に、ドイツ語学習と辞書編纂の命を受けている。市川と加藤は、蘭独・独蘭辞典、蘭独対訳文典などを使ってドイツ語を学習し、二年後の一八六二（文久二）年冬、『官版独逸単語編』（洋書調所編）を完成した。これが日本人の手による最初の独和辞典（単語集）である。

一八六二（文久二）年、かつての幕府天文方、その後の、蛮書和解御用、洋学所（翻訳局）を前身とする蕃書調所に、露学とともに独逸学が設置されるが、その時に、前記の市川、加藤の両名が教授職に、市川の弟子などが教授出役に命じられている（なお、英学は一八五九［安政六］年に、仏学は六一年に設置されている）。六二年六月、蕃書調所は洋書調所と改称されたが、当時、ドイツ人教師はおらず、ドイツ語を独学した日本人教師による原書講読のような教育が行われていた。ドイツ語を学ぶ生徒数は五〇名ほどであったが、四、五年後の明治維新前には一〇〇名ほどになる。六三年八月、洋書調所は開成所と改称された。

本学建学までの「独語学」

開成所は国事多難をもって一時閉校されたが、王政復古とともに英仏独三か国語の教育を目的として復活し、教育体制の整備が進むなか、英仏の外国人教師が一八六八（明治元）年の暮れに着任したのに続き、七一年にはスイス人ヤーコブ・カデルリー（カドリーとも称した。原語ではJacob Kaderly）もわが国最初のお雇い独逸語教師として着任している。開成所は六九（明治二）年に大学南校と改称。七一（明治四）年正月にプロシア政府から派遣されたホルツが着任。これを機に、校内に独語学の学生を対象にした独逸学仮教場を設け、修業年限三か年で、十六歳から十八歳までの者三〇名を募集した。なお、同年四月には、神田錦町三丁目一番地に別校舎を建て、独逸学教場となった。七一年七月、大学南校は単に南校と改称、さらに翌七二年八月には、本校が第一大学区第一番中学に、独逸学教場は（洋学第一校と改称された後）第一大学区第二番中学になった。またさらに、第一大学区第二番中学が七三年三月から第一大学区独逸学教場と称される一方、第一大学区第一番中学は同年四月に、高等教育を施す専門教育機関としての開成学校になる。開成学校では、生徒が（上級生の）専門学生徒と（下級生の）語学生徒とに分けられる。そして同年十一月、開成学校の語学生徒と外務省独魯清語学所、および独逸学教場の三つが合併し、官立の外国語学校「東京外国語学校」が誕生することになる。これをもって本学の「建学」となるわけであるが、建学の成り行きからして当然、英、仏、露、支の言語と並んで、独語科も設置された。なお、東京外国語学校の建学に際し、独逸学教場が合併の対象にならなかったという見解もある。

その他

ドイツ語に対する研究熱は時代の流れとともに高まってくるわけであるが、この背景には、普仏戦争（一八七〇

［明治三］年―七一年）でドイツが圧倒的な勝利をおさめ、ドイツ帝国が建設されたことがある。日本の陸軍も、フランス式からドイツ式に切り替えられ、後に、陸軍の諸学校に東京外国語学校の卒業生が数多くドイツ語の教官として送り込まれるようにもなる。また、ドイツ語を教える私塾が東京にたくさんでき、明治初期には約三〇、明治十年代から大正初期には五〇を超えたとのことである。その代表的なものが一八八三（明治十六）年創立の独逸学協会学校（今の独協大学）である。ドイツとの文化的交流も盛んになり、七一年にドイツの医学者たちが招聘され、七六年にはベルツが来日し、東大医学部で教鞭をとっている。さらには、一八八二（明治十五）年頃、憲法の制定が重要な課題になり、伊藤博文が憲法調査のために渡欧し、最終的には、ドイツに範をとることになったことは有名である。一八六八（明治元）年から七四（明治七）年までに、日本近代化のために招いた外国人教師は延べ五八〇名を数える。また、政府留学生は、明治初年から日露戦争期（一九〇四［明治三十七］年から〇五年）までで六八三人にのぼり、そのうちの八〇パーセントがドイツに派遣されている（小塩節『ドイツと日本』講談社学術文庫、一九九四年）。このように日本とドイツとの関係、あるいは日本におけるドイツ語教育の重要性は増してくるのであるが、本学の、建学後の歴史は必ずしも順調と言えるものではない。

二　東京外国語学校時代　一八七三―一九四四年

1　建学期

建学期の独語科

複雑な経過を経つつも、一八七三（明治六）年に本学は建学を迎えた。本学の応募資格は十三歳以上十八歳以下の小学科卒業生。修業年限は当初四年であったが、翌年には六年に改定、さらに三年後には五年になるなど一定しない状況だった。クラス編成は、上下二等に分かれ、さらに各等には六か月課程の級が四つ設けられた。建学当時の独語科のクラス毎の生徒数は、合併により引き継いだ生徒に新入生を加え、次の通りであった。

	第一級	第二級	第三級	第四級
上等				一〇人
下等	二〇人	二七人	二一人	一八人

生徒数は計九六名である。ただし、上等第一級第二級第三級には生徒がいなかった。なお、独語科の生徒数は七四年は一七九人、七五年は一六一人、七六年は二七四人となっている。その後、漸減し、毎年一五〇人前後で、一八八一（明治十四）年以降は一〇〇人ほどになる。なお、卒業生は、八〇年の二名が最初である（仏語露語では前年に最初の卒業生が出ている）。その後、八一年にゼロ、八二年に二名、八三年に七名、八四年に六名で、卒業生は合計一

七名にすぎない。

建学当時の東京外国語学校の教育態勢は、ネイティヴスピーカーのドイツ人などを主体としたものである。一八七四（明治七）年三月に作成された教員名簿によると、独語学の教諭はドイツ人五名（ウイットコウスキ、トーゼロウスキ、ハンゼン、クライネル、コニツケ。原語の記録はなく、一九〇九［明治四十二］年まで正確なスペルおよび呼称は分からない）を数える。日本人は独逸語学教諭心得の山内光屋、渡邊広吉の二人のみである。これは欧米人による教育に重点を置かざるをえなかった当時の教育状況を示している。しかし、一八七九（明治十二）年になると、ドイツ人二名、スイス人一名に対して、日本人教員が二名、兼嘱教員一名となっており、徐々に日本人主体の教育態勢になっていく。八〇年の教員名簿では、ドイツ人一名、スイス人二名に対して、四名の日本人教師が記載されている。建学一〇年後の八四（明治十七）年の教員名簿では、独語科の陣容は、次のように、ネイティヴスピーカー二名を含む、計五名である。

一八八四（明治十七）年

教諭　寺田勇吉

教員　リウドルフ・レイマン（普国）、パウル・マエット（独国）

助教諭　髙木計

御用掛　藤山治一

なお、この時、仏語学の教育陣容は、教諭二名、教員一名（フランス人）、助教諭三名の計六名、露語学の教育陣容は、教諭三名、教員一名（アメリカ人）、兼嘱教員一名の計五名である。一八八五（明治十八）年までに、独語学の教諭、教員などとして記録されている外国人は一二名、日本人は一〇名ほどである。この時期、教育態勢は必ずし

も安定していたとは言えない状況である。

カリキュラムは、現在と比べるときわめて単純なものであるが、おおよその感じをつかむため、一八七三（明治六）年当時の独語科の学科課程表を載せる（下等のみ）。

下等語学第一級　一週三十時
読方　五時　文典　三時　会話　四時　地理　二時　作文　三時　暗誦　二時　算術　五時　書取　三時
歴史　三時

下等語学第二級　一週三十時
算術　六時　作文　三時　読方　五時　会話　四時　暗誦　三時　書取　四時　地理　二時　文典　三時

下等語学第三級　一週三十時
読方　六時　算術　六時　暗誦　三時　文典　三時　会話　四時　地理　二時　作文　三時　書取　三時

下等語学第四級　一週三十時
算術　六時　暗誦　三時　文法　三時　読方　六時　会話　六時　書取　四時　作文　二時

カリキュラムは、一週三〇時間の大方が語学に割り当てられる語学中心のものと言えよう。すでに文法をもって外国語を学ぶ態勢ができているということ、および専門学校への進学の準備として、地理、歴史というような、語学以外の科目もわずかながら設けられている（この傾向は時代とともにさらに強化される）ことなどが注意を引く。

廃　校

一八七三（明治六）年に建学されたこの東京外国語学校は、商業重視の政策により、一八八四（明治十七）年に設立された東京外国語学校所属高等商業学校と文部省直轄東京商業学校が合併し、八五年九月に、東京商業学校になる

に及び、一二年の短きをもって廃止される。なお、その少し前に、独語科の生徒は、仏語科の学生と共に、東京大学予備門（後の第一高等学校）に転属させられている。

東京外国語学校の廃止に前後して、すでに述べたように、一八八三（明治十六）年には独逸学協会学校（後の独協大学）が設立され、また、八五年には学習院でもドイツ語教育が始まるとともに、八七年には東京大学文学部（当時文科大学）に独逸文学科が新設されるなど、ドイツ語学・文学の教育が広く行われるようになってきていた。また、一八九四（明治二十七）年の高等学校令の発布により、各地に設置されるようになった旧制高等学校では語学教育が重視され、なかでもドイツ語の人気は高く、盛んに教育が行われた。森鷗外がドイツの文学作品をしきりに翻訳紹介したのは八九年頃からである。哲学の分野でも、ドイツ哲学が主流をなすようになる。

2　創立・独立期の独語学科

一八九六（明治二十九）年、第九帝国議会において衆議院および貴族院の両院が外国語学校の開設を建議し、その結果、翌九七年、高等商業学校に附属外国語学校が付設される形で、正科三年、特別科三年以内の教育体制をもって、東京外国語学校が再興された。これをもって本学の創立とするのであるが、その際、英語、仏語、露語、西語、清語、韓語と並んで、独語学科が設置される。正科の生徒数は二二名、特別科の生徒数は四一名であった。

さらに、一八九九（明治三十二）年四月には、高等商業学校から独立し、東京外国語学校と改称されることにより、本学は、文部省直轄の三官立専門学校の一つとして独立したことになる（他の二つの官立専門学校は東京美術学校と東京音楽学校）。独語学科の生徒数は、正科が三二名、特別科が六二名であった。なお、この年すでに、附属東京外

第１回卒業生（明治33年）記念撮影。（後列右より）安樂直治、中村達雄、田代光雄、弓削哲三、井手岩吉。（前列）久野英一、山口弘一教授、水野繁太郎教授、マッティーゼン教師、山口小太郎教授、弓削久兵衛

国語学校時代の第一回の特別科（二年制）修了生六名を出している。次の年には、第一回の本科（三年制）卒業生七名を出している。このうちの一人が後に、本学の教授として、独語学科の発展に貢献した田代光雄である。

ドイツ語は、このように本学の建学、そして創立、独立のすべての際に、一つの教育科目として重要視されていたことになる。なお、この本学の再興に関しては、一八七四（明治七）年三月の『東京外国語学校官員並生徒一覧』に独逸語学下等第五級の生徒として記録されている大村仁太郎（当時学習院大学教授）が幾多の時間と労苦を費やしたとのことである。

一八九七（明治三十）年、本学の再興（創立）と共にドイツ語部に迎えられたのが山口小太郎である。山口小太郎は、当時、学習院教授であったが、まず、講師を嘱託され、翌年九月に本学の教授になっている。そのとき同時に水野繁太郎も教

大村仁太郎

山口小太郎

授として着任した。山口小太郎は、一八八四（明治十七）年に十八歳で旧東京外国語学校を卒業した本学卒業生で、ドイツ語のバイブルとも呼ばれた三太郎文典、大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎共編『独逸文法教科書』（独逸語学雑誌社、一八九四年）の編者の一人として、また、独逸学協会学校の創始者の一人として有名である。水野繁太郎は、東京外国語学校に十五歳から十九歳までの四年間在学し、一八八五年の本学廃校の際に中退したと考えられる。なお、水野繁太郎は、ドイツ語を主要外国語とするイエズス会の大学（上智大学）設立の企画に当初から参画し、一九一四（大正三）年の上智大学創立とともに、同大学の専任教授となって本学の教授を退いた。山口小太郎と水野繁太郎は車の両輪のように、草創期の本学におけるドイツ語教育の発展に尽したとのことである。当時の授業風景は、「外語は何しろ週三〇時間もやるので忽ち難しいものにかゝる有様で……（中略）……総じて外語の語学的水準は一頭地を抜いて高く……」と記録されている（「外語懐古録」『東京外語会報』　第七九号一九四二年十二月）。

3　その後の変遷

明治後期

本学再興五年後、すなわち一九〇二（明治三十五）年の独語学科の教員名簿からは、日本人主体の教育体制がさらに整い出していることが見てとれる。肩書きの名称も大幅に変わり、現在に通じるものになっている。

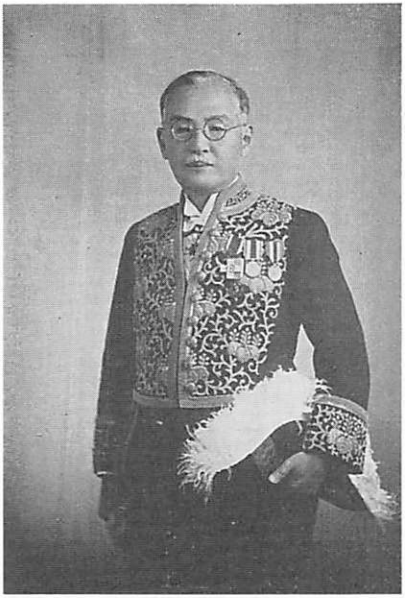
一九〇二（明治三十五）年

教授　尺秀三郎、山口小太郎、水野繁太郎、武内大造

助教授　田代光雄

外国人教師　オット・シェーレル（ドイツ）

講師　植村正介



武内大造

武内大造（東大卒）は、一九〇〇（明治三十三）年に教授として着任、途中他校などに七年ほど転出したこともあるが、本学に三〇年以上勤務し、一九三二（昭和七）年退官（名誉教授）。なお、退官後も、講師として一九三九（昭和十四）年まで本学の教壇に立った。尺秀三郎（ライプチッヒ大卒）は、一九〇一（明治三十四）年に教授として着任、一九〇九年まで八年間教壇に立っ

た。田代光雄は、すでに述べたように、本学の独語学科に一八九七（明治三十）年九月入学、一九〇〇年首席で卒業した第一回卒業生である。翌〇一年に助教授として着任、一〇年から教授になる。一九四〇（昭和十五）年三月退官。植村正介は、他校出身者であるが、講師として一九〇一（明治三十四）年から〇六年まで教壇に立った。男爵、無給などの付記が教員名簿に見られる。この他にも、本学出身者の教師、他校出身者の教師などが毎年おおむね一、二名講師として本学の教壇に立っている。本学再興一五年後、すなわち一九一二（明治四十五）年の独語の教員名簿は次のように記載されている。教育体制に大きな相違は認められないが、〇九年からは外国人教師の氏名に原語が併記されるようになった。

一九一二（明治四十五）年

教授　山口小太郎、水野繁太郎、大津康、田代光雄、武内大造

外国人教師　エルウイン・ワルテル Erwin Walther（ドイツ）

講師　小笠原昌斎

大津康は、一九一一（明治四十四）年から教授の職にあり、一九一五（大正四）年に退官。小笠原昌斎（後に稔と改名）は、一九〇四（明治三十七）年の本学卒業生で、独逸学協会学校教師になった後、一二年から本学の講師として教壇に立ち、一九二一（大正十）年に教授になる。一九四二（昭和十七）年の退官まで三〇年以上にわたって教鞭をとり、ワーグナー楽劇の全訳で有名である。

大正期

特記すべきことは、一九一四（大正三）年、外国人教師 Dr. Walther Röhn が着任したことである。ロエンさん、

あるいはレーンさんと呼ばれ、一七年から本学教授になった辻高衡のベルリン大学附属東洋語学校在任時代の教え子でもある。交替の激しい外国人教師のなかにあって、一九五七（昭和三十二）年秋に没するまで、ほぼ四五年間外語で教鞭をとった。一四年の独語科の教師陣は次のような構成になっている。

一九一四（大正三）年

教授　山口小太郎、水野繁太郎、田代光雄

講師　小笠原昌斎、鼓常良

外国人教師　ワルテル・ロエン Walther Röhn（ドイツ）

この後、一九一七（大正六）年に山口小太郎（教授）が急逝、山口小太郎の後任として、同年四月、辻高衡が教授として着任した。辻高衡は、一八九三（明治二十六）年に独逸学協会学校独逸語専修科を卒業した後、一九〇五（明治三十八）年九月ベルリン大学附属東洋語学校教師を嘱託されたりし、滞独一四年の異色の教授である。「本邦独逸語学界の第一人者」であったばかりでなく、「広範な人脈を有し、平素日独両国融和の為め努力斡旋せられたる所多大」と書かれている（『ゲルマアニア　故辻教授追悼号』一九二九年十二月）。一九二八（昭和三）年十二月急逝した（享年六十歳）。

ワルテル・ロエン

一九一九（大正八）年に学科が部に改正され、各部に文科、貿易科、拓殖科が設置される。文科には、文学と法律の二コースがあった。ドイツ語部は文科と貿易科だけで、拓殖科は設置されなかったが、第二外国語として、英語、仏語と共に、独語が設置さ

れた。

明治から大正へと、教授陣も充実するに伴い、日本のドイツ語は東京外国語学校独語部の時代と言えるようになってきた。しかし、四帝大独文科の膨張発展、主としてドイツ語で教授する上智大学の設立、大阪外国語学校の誕生等によって東京外国語学校も唯一的存在を誇るわけにはいかなくなってきた。山口、水野が退官した後の一九二一（大正十）年、およびさらに五年後の一九二六（大正十五）年の独語科の教師陣は次のような構成になっている。

一九二一（大正十）年

教授　武内大造、辻高衡、田代光雄、小笠原昌斎

外国教師　ワルテル・ロエン Walther Röhn

非常勤講師　水野繁太郎、小柳篤二

一九二六（大正十五）年

教授　武内大造、辻高衡、田代光雄、小笠原昌斎

外国教師　ワルテル・ロエン Walther Röhn

非常勤講師　水野繁太郎、小柳篤二、レオポルド・ウインクラー、三谷隆正

一九二六（大正十五）年の構成の特徴は、外国人が二名になっていることである。この態勢は、これ以降長らく続く。小柳篤二は、一九〇九（明治四十二）年本学卒で一九二二（大正十一）年から一九三〇（昭和五）年まで母校の講師として活躍した。

昭和前期

一九二七（昭和二）年東京外国語学校の大学昇格は見送られたが、修業年限は一年延長されて、三年制から四年制となる。三〇年に勝静夫、青木重孝が講師に就任。勝静夫は一九一三（大正二）年本学卒で、広島の俘虜収容所の通訳として特異な経験をもち、一九四二（昭和十七）年七月に没するまで講師として勤務。青木重孝は一九二五（大正十四）年本学卒で、一九三〇（昭和五）年に講師、三二年三月、武内教授依願免官と同時に教授に任ぜられ、四六年に逝去。他校出身者の講師として有名なのは、一高教授だった丸山通一で、一九二七（昭和二）年から講師として教壇に立ち、三八年一月在職のまま逝去。

一九三九年の独語科の教員名簿には、次のような名前が載っている。

一九三九（昭和十四）年

教授　田代光雄、小笠原稔、青木重孝、生駒佳年

雇外国人教師　ワルテル・ロエン Walther Röhn

講師　勝静夫

外国人講師　マルテイン・ネトケ Martin Netke

ここに新たに名前の確認できる生駒佳年は、一九二三（大正十二）年本学卒（貿易科）で、いくつかの学校で教壇に立った後、一九三九（昭和十四）年に教授に就任。戦時中ゾルゲ事件の通訳も行った。戦後、長らく独語部の主幹あるいは主任教授を務めた後、一九六一（昭和三十六）年に退官。

明治、大正期の本学の独語学科を支えてきた田代、小笠原が一九四〇（昭和十五）年、四一年と続いて退官すると、東京大学独文科出身の植田敏郎、藤田五郎が本学出身の生駒、青木両教授に加わる。植田敏郎は、一九三一（昭和

六）年に東大を卒業、田代教授の後任として四〇年に教授として着任。藤田五郎は、一九三五（昭和十）年に東大を卒業、小笠原教授の後任として四一年に教授として着任。したがって、四一年の新しくなった教師陣は、以下の六名になっている。

一九四一（昭和十六）年

教授　生駒佳年、青木重孝、植田敏郎、藤田五郎

外国人教師　ワルテル・ロエン

外国人講師　マルテイン・ネトケ

藤田五郎は、一九七四（昭和四十九）年に退官するまで、各種のドイツ語教育書を作成するなどして、ドイツ語教育界では誰もが知る存在だった。ドイツ人にドイツ人以上にドイツ語に詳しいと言わせしめ、昭和期の本学の独語学科を代表する名物教授になった。一九八三（昭和五十八）年に『ことだまの万華鏡（藤田五郎先生古希記念論文集）』（広池学園出版部）が刊行されている。一九九七（平成九）年一月逝去（享年八十五歳）。最後まで和独辞典の刊行を夢見ていたとのことである。

4　入学者数、卒業者数

再興された高等商業学校附属外国語学校および東京外国語学校（一八九七［明治三十］年から一九四四［昭和十九］年）の場合、一八九七年、独語科の本科に入学した二八名のうち、三年後に卒業した者は七名、同様に九八年入学者一六名に対し三年後の卒業者は五名、九九年入学者一四名に対し三年後の卒業者は九名、以降大正末期まで毎年

二〇から三〇名の入学者のほぼ半数しか卒業しないという傾向が続いている。それぞれの時期をまとめると、次のようになる（選科卒業生は省く）。

（イ）明治期（一九〇〇［明治三十三］年から一九一二［明治四十五］年卒業）

一八六名

［注］卒業時期は〇七年までは七月、十一月など様々、一二年までは三月

（ロ）大正期（一九一三［大正二］年から一九二六［大正十五］年卒業）

二四六名

［注］卒業は三月

（ハ）昭和前期（一九二七［昭和二］年から一九五一［昭和二十六］年卒業＝旧制最後）

五五一名

［注］卒業は原則として三月、ただし四一年には三月と十二月の二回、四二年、四三年、四四年は九月

以前の志願者数は定かではないが、戦時中の一九三八（昭和十三）年、ドイツ語部の募集人員三〇名に対し、一四九名の志望者があった。三九年は一三一名。四三年、ドイツ語部の募集人員三〇名に対し、四三五名の志望者があった。かなりの数の志願者と言えよう。この時期の入学者は、後に、勤労動員に学徒出陣にと、苦難の道を歩む。

なお、一九一一（明治四十四）年に初めて陸海軍選科生一〇名が修了、このうち独語科は四名。陸海軍委託学生のうち独語科（独語部）を修了した人は、以降一九四四（昭和十九）年までに一三〇名を超える。なかでも、一九一八（大正七）年卒の上村幹男は、陸軍大学の教官として欧州戦史を担当し、主としてドイツ軍の作戦を中心に講義した人物として有名である。

三　東京外事専門学校時代　一九四四－一九四九年

日本が第二次世界大戦に突入すると、東京外国語学校も、戦時体制の影響をもろに受けるようになる。一九四二（昭和十七）年、修業年限が六か月短縮され、四三年九月に四年生は繰り上げ卒業となる。これが、東京外国語学校の最後の卒業式になる。同時に、三年生も、七割が学徒出陣に、三割が勤労動員に駆り出される。このような修業年短縮などの臨時措置を制度的に固定するために、四四年、東京外国語学校（四年制）は、東京外事専門学校（三年制）に強制的に移行される。戦後すぐの五一年までの七年間の存在でしかないが、独語部は、ドイツ科と改称され、東京外事専門学校の第二部の一つの科になる。四一年の東京外国語学校入学者は、東京外事専門学校の卒業生として四四年に臨時措置により卒業する。四四年の教師陣は、以下のように、東京外国語学校時代のまま、引き継がれている。

一九四四（昭和十九）年

教授　生駒佳年、青木重孝、植田敏郎、藤田五郎

外国人教師　ワルテル・ロエン

外国人講師　マルテイン・ネトケ

一九四四（昭和十九）年に、東京外事専門学校の第一回入学式が催される。旧東京外国語学校と同様、生徒定員や入学定員については学則に規定がないが、同年の入学定員は約三〇名だった。学科目外国語（ドイツ語）の時間数は、東京外国語学校時代一年生の場合、週二〇時間だったが、東京外事専門学校では一年生の場合、年間七〇〇時間にな

っている。ただし、第二外国語が影をひそめる。なお、四六年三月に、東京外国語学校の最後の、すなわち四三年入学の学生が卒業。また、四八年の入学式は東京外事専門学校最後のものとなる。

存続七年間の東京外事専門学校の入学者数二三五名、卒業者数は、東京外国語学校入学者も含むが、九七名になる。三分の二の生徒が卒業しなかった（できなかった）ことになる。なお、創立以降の東京外国語学校時代（東京外事専門学校時代を含む）の独語科総卒業生数は九八三名である（選科卒業生を除く）。

四　東京外国語大学時代　一九四九年―現在

1　変　遷

国立学校設置法の施行により、一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、六九校の一つとして、東京外国語大学（四年制）が設置される。一二語科の一つドイツ学科として、英米、フランス、ロシヤ、イタリア、イスパニヤ、ポルトガル、中国、蒙古、インド、インドネシヤ、シャムとともに設置された。学生定員は三〇名、ただし、翌年には四〇名になる。発足時の在籍者数は三四五名だが、時代の変化を受け、男女共学制が導入され、女子学生の入学が可能になった。なお、ドイツ学科の女子卒業生第一号は一九五四（昭和二十九）年の新制大学第二回卒業生根本よしである。この年に卒業した女子学生は他三名だった。なお、一八九七（明治三十）年より五五年間続いた専修科は廃止された。また、東京外事専門学校は、東京外国語大学に包括される形で、一九五一（昭和二十六）年まで二年間存続

畑中伊三郎

生駒佳年

藤田五郎

する。

一九五〇（昭和二十五）年当時のドイツ学科の教師陣および科目表は次のようである。畑中伊三郎は、講師として五〇年から約一〇年間教鞭をとった。

一九五〇（昭和二十五）年

専攻学科

ドイツ学科　外専教授兼外大教授　生駒佳年

外大助教授兼外専教授　藤田五郎

外専講師兼外大講師　畑中伊三郎

外大講師　ワルテル・ロエン

専攻科目（数字は単位数）

ドイツ学科　ドイツ語学・文学講座　ドイツ語初級　二四（第一年）

ドイツ語上級　二四（第二年）

ドイツ事情講座　普通講義　一二（後期）

特殊講義　一二（後期）

演習及講読　一六（後期）

卒業論文　一〇（後期）

この表より、一年次二年次の前期専攻語学の六コマ態勢がすでにあったことが確認できる。一九五二（昭和二十七）年、三年次以降の後期に、語学文学コース、国際関係専修コースの二コースが設けられ、科目表は次のようになっている。

専攻科目（数字は単位数）

ドイツ語学・文学講座

ドイツ語初級　一六（第一年）
ドイツ語上級　一四（第二年）

ドイツ事情講座

普通講義　語文専修　一二
国際専修　一二
特殊講義　語文専修　一二
国際専修　八
演習及講読　語文専修　一六
国際専修　一二
卒業論文　語文専修　八
国際専修　八

一九六四（昭和三十九）年、ドイツ科をドイツ語学科に改称。六八年から学園紛争が始まる。この時期、十分な授業も行うことができず、卒業式は変則的な形で行われた。藤田五郎は本学講堂で学生との団交の場に立ち会ったり、福山明治は学生課長として紛争の解決にかかわった。

一九六六（昭和四十一）年四月、これまで学生数四〇名一クラスのドイツ語学科の学生数は六〇名二クラスになった。この定員増加に伴い二つのポストが新たに認められ、松井利夫が六六年に、山口幸輔が六七年に着任した。ドイツ学科の教員は、日本人六名になる。さらに、一九七六（昭和五十一）年に、一般語学ドイツ語教員として、平野篤司が助手として着任した。所属は異なるが、協力してドイツ語教育に携わることになり、したがって、実際上、ドイツ語関係の教官は七名になったことになる。また、一九八六（昭和六十一）年、当時の大学入学志望者の増加という

社会的状況に基づき、全国的な国立大学学生定員の臨時増募が行われ、ドイツ語学科も学生の六名増を受け入れ、その引き換えとして（ただし、学生定員返還のときには同時に返還するとの条件で）教員ポストが一つ与えられることになった。従来から懸案だった事情ポストを補充することになり、八九年に小沢弘明が助手として着任。ドイツ語学科の日本人スタッフは八名になる。この後、一九九二（平成三）年に山口幸輔が急逝。このポストは、臨時増募の学生定員の返却に伴って返却する予定であったため、ドイツ学科として初めて任用法を適用し、九四年、後任としてドイツ人アンドレアス・ヘンドリッヒが講師として三年の期限付きで着任した。

一九九五（平成七）年、大学設置基準の緩和に伴い、本学も改革の作業に取り掛かる。長い議論の後、外国語学部を七課程三大講座に改組し、ドイツ語学科は欧米第一課程ドイツ語専攻となる。なお、欧米第一課程は英語専攻とドイツ語専攻によって構成される。教官組織も改組され、ドイツ語学科の教官はそれぞれ言語・情報講座、総合文化講座、地域・国際講座のどれかに属するようになった。

一九八六（昭和六十一）年の学生の臨時増募に伴い獲得したポストをなんらかの形で恒常的なポストにするのが学科の急務であった。このような折に、文部省から提案されたのが欧米第一課程としての、定員付き三年次編入制度（定員二〇名）である。従来から三年次編入という制度があったが、これは定員のないもので、学生を受け入れるのも受け入れないのも自由であった。一九九七（平成九）年、欧米第一課程として定員二〇名の第三次編入制度を導入することが正式に認められた。専攻語ごとの定員が決まっているわけではないが、ドイツ語専攻は約六名を取ることが目安となっている。この制度導入により、言語・情報講座（ドイツ語専攻）に教授ポストが一つついた。このことにより、学生の臨時増員の返却の後にも、実質的にはドイツ語専攻として八名体制が確保されることになった。九七年には四名、九八年には五名が三年次に編入学した。

2　東京外国語大学時代の教師陣

日本人教官

新制大学の発足以来、生駒、藤田、畑中らが大学を去っていったが、それに伴い、また、幾人もの教官が着任している。奈良文夫は、一九四二（昭和十七）年本学卒、五七年に助教授として着任、六五年教授、八二年に退官。野村泫は、一九四六（昭和二十一）年本学卒、五二年から非常勤講師を務めた後、五六年に助手として着任、六〇年に助教授、六七年に教授、八七年に退官。藤田五郎退官の後、学科主任として長いこと学科のために尽力した。グリム童話の研究などで有名。八七年に『Spuren（野村泫先生退官記念論文集）』が刊行された。佐藤洋子は、一九五五（昭和三十）年本学卒で、五七年から二年間副手を務めた後、六二年から六四年まで助手として勤務。本学初の女性教官でもあった。福山明治は、一九五七（昭和三十二）年本学卒、六一年に副手になった後、六四に講師、六七年に助教授、七八年に惜しくも病気のために急逝。病気療養中も、学生が自宅にまで授業を受けに行き、このことは新聞にも取り上げられた。もし今も存命中ならば、この年史をまとめるに最もふさわしい人であったろう。中世語学が専門。菊池武弘は一九五七（昭和三十二）年本学卒、六二年から立教大学に転出する七〇年まで留学生課程の講師、助教授を務める。専門はドイツ文学。

他大学出身者として山口幸輔（東大出身）、小沢弘明（東大出身）、アンドレアス・ヘンドリッヒ（ミュンヒェン大学修士）がいる。山口幸輔は、一九六八（昭和四十三）年に熊本大学から講師として着任、七一年に助教授、七七年に教授、野村退官の後は、ドイツ語学科の学科主任として尽力し、一九九二（平成四）年に急逝。小沢弘明は一九八

九（平成元年）年に助手として着任、一九九六（平成八）年十月に千葉大学に転出。アンドレアス・ヘンドリッヒは一九九三（平成五）年に任用法により講師として着任、三年後の九六年に退官。

ドイツ語学科に属さなかったが、鈴木幸蕎は、一九四三（昭和十八）年本学卒、五一年に社会学の講師として着任、七五年に学生部長、八一年十二月に学長就任。一九八五（昭和六十）年十一月に学長職を退き、現在和洋女子大、同短大の学長を務めている。

外国人教師

一九五八（昭和三十三）年秋、四五年にも及んで外語で教鞭をとったワルテル・ロエンの死後、以下の人が本学でドイツ人の外国人教師として教鞭をとった。

五九年四月から　ギュンター・オイゲーン・バールト
六三年四月から　ヴィルフリート・シュルテ
六六年四月から　ペーター・キュンメル

ヴィルフリート・シュルテは、後に駐日ドイツ大使館などに長年勤務した。キュンメルの後任として一九六九（昭和四十四）年四月に着任したのがハインツ・シュタインベルグである。一九九三（平成五）年三月に六十二歳をもって辞職するまで二四年の長きにわたって、本学のドイツ語教育に熱心に携わった。

一九七二（昭和四十七）年に、オーストリアのウイーン大学との間に交換制度が成立し、こちらからウィーン大学の日本語学科に教師を送る代わりとして、オーストリア人が一名外国人教師として本学の教壇に立つことになった。

二年交替を原則に、次のような人が着任している。

七三年四月から　ヘルガ・マルコ
七五年四月から　エルヴィン・コラー
七七年四月から　ヨハンナ・マティアゼック
七九年四月から　エルンスト・シャイブル
八一年四月から　ブリギッテ・ペンチアス
八一年十月から　イルムトラウト・アルブレヒト
八三年十月から　フランツ・クンプル
八六年四月から　ペーター・ジャコムッツィ
八八年四月から　バルバラ・エーベルト
九〇年四月から　レナーテ・ジャコムッツィ
九三年四月から　コルネル・ツェーリック

なお、一九九六（平成八）年四月から現在まで、九四年にハインツ・シュタインベルグの後任として着任したオーストリア人マルティン・クバチェクがこのポストを占めている。

現メンバー

現在、欧米第一課程ドイツ語専攻には、八名の教官が属している。所属別に示すと、次のような構成になる。

言語・情報講座　在間進（教授）、木藤冬樹（助教授）、成田節（助教授）
総合文化講座　松井利夫（教授）、谷川道子（教授）、平野篤司（教授）
地域・国際講座　増谷英樹（教授）、相馬保夫（教授）

言語・情報講座所属の在間進は、一九六七（昭和四十二）年本学卒、六九年に本学大学院修士課程を修了し、七九年に助教授として着任、一九九〇（平成二）年教授。専攻はドイツ語学。木藤冬樹は、一九八二（昭和五十七）年に専任講師として着任、九四年に助教授。専攻はフンボルト研究などのドイツ言語学。学習院大学出身。成田節は、東京都立大学を卒業後、一九八二（昭和五十七）年に本学大学院修士課程を修了、九七年助教授として着任。専攻はドイツ語学。

総合文化講座所属の松井利夫は、一九六二（昭和三十七）年本学卒、六六年に専任講師として着任、七一年に助教授、八〇年に教授。ロマン主義文学。谷川道子は、一九八七（昭和六十二）年に助教授として着任、九六年に教授。東京大学出身。専攻はドイツ演劇。平野篤司は、一九七三（昭和四十八）年本学卒、七五年に東京大学大学院修士課程を修了後、七六年に助手として着任、九四年に助教授、九七年に教授。専攻はドイツ文学。

地域・国際講座の増谷英樹は、一九七七（昭和五十二）年に専任講師として着任、七八年に助教授、八六年に教授。東京大学出身。ドイツ・オーストリア史の研究家。相馬保夫は、小沢弘明の後任として、一九九八（平成十）年に教授として着任。東京教育大学出身。専攻はドイツ史。現メンバーのうち半数が他校の出身者になっている。外国人教師として、一九九六（平成八）年に着任したドイツ人フランク・ミールケと、九四年に（二年間ハインツ・シュタインベルグの後任として）着任したオーストリア人マルティン・クバチェクがいる。現在、三クラス制の一部導入、語彙集の作成など、様々な試みを行っている。

卒業生

新制大学としての昭和期（一九五三［昭和二十八］年から八八年まで）のドイツ語学科の卒業生は総計一、五〇二

名（うち女子四二〇）。卒業は原則として三月であるが、大学紛争の影響を受けて、六九年には三月と六月と九月の三回、七〇年は、三月と五月の二回行われた。平成期（一九八九［平成元］年から九七年）の卒業生は総計五〇二名（うち女子三三一名）。

新制大学での卒業者累計は、二、〇八〇名（うち女子七九二名）、語学文学専修課程は五〇六名（うち女子一九七名）、国際関係専修課程は一、五七四名（うち女子五九五名）である。なお、一九九八（平成十）年三月までのドイツ語学科卒業者の総数は、東京外国語学校、東京外事専門学校時代も含め、三、〇〇七名（うち女子七五一名）である。ちなみに、九七年度の卒業生は六四名（うち女子三三名）、そのうち語学文学専修課程一二（うち女子五名）、国際関係専修課程五二（うち女子二八名）である。ドイツ語学科に関する九八年度の入学志願者および入学者数（定員六〇）は、入学志願者四〇八名（うち女子二四八名）、入学者数は六三名（うち女子四三名）である。

その他

本学は、一九七八（昭和五十三）年にビーレフェルト大学、ギーセン大学、マールブルク大学、七九年にエアランゲン大学、ゲッティンゲン大学と大学間交流協定を結んでいる。この交流協定に基づき、文部省による学生国際交流制度（現在は短期留学推進制度と呼ぶ）によってドイツへ派遣した学生数は以下のようである。ビーレフェルト大学へは一〇名（うち女子七名）、ギーセン大学へは六名（うち女子一名）、マールブルク大学へは二一名（うち女子一五名）、エアランゲン大学へは五名（うち女子二名）、ゲッティンゲン大学へは一六名（うち女子八名）である。一時期、一度に四名の学生をドイツに送ることもあったが、文部省のアジア重視の政策のため、一九九六（平成八）年にはゼロ、九七年に補欠で一名送ることができただけだった。今後のこの制度の見通しは暗いと言える。なお、この制度を

使わずに、たとえばロータリー奨学金であるいは私費でドイツに留学した学生も多い。

五　大学院

一九六六（昭和四十一）年に大学院外国語学研究科修士課程が設置された。それまでドイツ語学、ドイツ文学などを専攻しようとする学生は、他大学の大学院に進学しなければならなかったが、これにより本学での大学院進学が可能になった。ドイツ語学・文学の学生はゲルマン系言語専攻に所属することになる。ゲルマン系言語専攻の学生定員は、英語専攻と合せて一〇名であるが、ドイツ語専攻はそのうち四名となっていた。しかし、定員をオーバーしてとることは可能であり、九二年までの修了者は八五名である。七七年には、大学院地域研究研究科修士課程が設置され、ドイツ史などを専攻する学生にも、本学での大学院進学が可能になった。ただし、地域研究研究科では、専攻語による区別がないため、ドイツ語という区分はない。これにより本学大学院に外国語学と地域研究の二本柱ができたわけである。

しかし、時が経つとともに、本学で博士課程がないことの不便さが顕著になり、九二年、これまでの外国語学研究科と地域研究研究科が、アジア・アフリカ言語文化研究所の参加のもとに、一本化され、大学院地域文化研究科博士課程（前期・後期）が設置され、本学での博士号取得が可能になった。ドイツ語関係の学生は、前期課程（修士課程）の場合、ヨーロッパ第一専攻言語文化コースあるいは地域研究コースのいずれかに所属し、後期課程（博士課程）の場合、地域文化専攻に所属する。なお、ドイツ語およびドイツとの関わりで幅広く研究しようとする学生には前期課程国際交流専修コースへの道もあるが、ドイツ語関係でこのコースへの進学者は少ない。

「DER　KEIM」

本学外国語学研究科および地域研究研究科の院生のための雑誌『DER　KEIM』が一九七七（昭和五十二）年に野村泫の指導の下、院生江原吉博が中心になって創刊された。野村の退官後は、平野篤司に引き継がれ、一度合併号もあるが、昨年、第二一号が発行された。院生の会費、先輩諸氏の寄付金、夏季セミナーでの収益金、執筆者の負担金などでまかなわれている。博士後期課程ができてからは、後期課程の学生も執筆するようになった。現在は成田節も加わり、質の向上に努めている。野村が在任中、野村の提供するワインなどを傾けながら行う、時には激論になったこともある合評会は楽しい思い出である。なお、収録された論文数は一一五本、研究ノート三本に及ぶ。六六年に設置され、歴史の浅い、「コネ」のない本学大学院の卒業生が就職の口を探すためには、論文を書く以外に道はなく、『DER　KEIM』はそのための唯一の可能性と言えるものであった。『DER　KEIM』での論文を通して幾人もの学生が職を得ている。この点でも、野村の功績はきわめて大きいと言える。大学院が改組されるにあたり、本学の院生全体のための雑誌『言語文化』が創刊され、『DER　KEIM』の廃刊も一時話題にのぼったが、ドイツ語関連のみの雑誌があることのメリットが大であるとの理由で、『DER　KEIM』の存続が決まった。

六　学生の活動と進路

語　劇

一八九七（明治三十）年の創立以来、一九〇八（明治四十一）年から一九一九（大正八）年までの間と太平洋戦争を挟んだ一九三七（昭和十二）年から四六年の時期を除いて、ほとんど毎年、語劇大会（あるいは語劇祭）が開催さ

クライスト作「シュロッフェンシュタイン家」（昭和10年11月上演）

れてきた。ドイツ語の語劇の開催は、合計七五回に及んでいる。一九九七（平成九）年は残念ながらドイツ語科の語劇は行われなかった。

一九一九（大正八）年、語劇大会が一〇年ぶりに再開され、当時ウインクラー、ロエンの両ドイツ人教師が学生の演劇指導などを熱心に行った。ウインクラーは演劇に明るく、演技を指導し、ロエンはドイツ語の話し方や正しい発音を指導した。

特別な意味合いを持つ語劇大会の一つは、一九二一（大正十）年の、ゲルマアニア会主催「独逸学生義援語劇大会」であろう。ドイツ語科の出し物はホーフマンスタールの「痴人と死」。英、露、スペイン、支の各語科も賛助の形でシェークスピア「リチャード二世」などを演じてくれた。「生活に困窮しているドイツの学生たちにできるだけ多くの寄金を贈ろう」と、懸命に入場券を売り歩き、出納帳の帳尻は一、二七五円となり、ゲルマアニア会代表がドイツ大使館を訪れ、全額を寄付した。もう一つの語劇は、一九四七（昭和二十二）年に一一年ぶりに開催された戦後初の語劇祭であろう。

これは「歴史的快挙」と言われるほどのものだった。全一二科が参加し、ドイツ科は「シュロッフェンシュタイン家の人々」を上演した。極めて思い出深い語劇祭になったようである。

なお、一九二五（大正十四）年に文部省が語劇での衣装や小道具の使用を禁じたため、金ボタンの制服で語劇を演じた。また、一九四〇（昭和十五）年の頃には、従来の語劇大会に代わり、「語学大会」が催されたこともある。

卒業生の進路

ドイツ語学科の卒業生の進路で特徴的なことは、大学での教職に就く率の高さである（伊藤暢章『ドイツ語科出身の教育者、学者、研究者たち』［未刊］参照）。一九三四（昭和九）年の『外語同窓会誌』再興四号「本科卒業者職業別」という資料によると、その時までのドイツ語部卒業者五七九名のうち、教育関係の職業に就いているのは七九名（一三・六パーセント）で、その内訳は、大学・高校・専門学校が六九名、陸海軍諸学校が三名、その外の学校が七名となっている。英語部の場合、卒業者九〇〇名のうち教職に就いているのは三四六名（三八・四パーセント）で、内訳は、大学・高校・専門学校が四七名、陸海軍諸学校が三名、師範学校が五名、中学校が一七一名、高等女学校が一八名、実業学校が八四名、その他の学校が一八名となっている。英語部卒業者で教職にある者の約八〇パーセントは師範学校、中学などの中等教育機関で教えているのに対して、ドイツ語部卒業者ではそれがゼロで、逆に、大学などの高等教育機関で教えているのは八七パーセントである（英語部では一三パーセント）。このように大学で教職に就くものが圧倒的なのである。明治期の卒業生の約三分の一は、高校、高専、大学あるいは陸海軍諸学校のドイツ語教員となっている（ただし、第四回卒業生あたりから、外国語学校卒業後、東京文科大学［東大文学部］独逸文学科、東京法科大学［東大法学部］、京都法科大学［京大法学部］などに進学する者が目立ってくる）。なお、仏語部の場合、

大学・高校・専門学校が三三名で、六二パーセントである。この背景には、一八九四（明治二十七）年の高等学校令によって各地に設置された旧制高等学校でドイツ語の人気が高く、ドイツ語が熱心に学ばれたこと、戦後の新制大学でも教養部にその伝統が引き継がれたことがあろう。新制大学に限って見ると、卒業生二、〇〇四名のうち約二六〇名（約一三パーセント）が大学で教職に就いており、昔の伝統は今も引き継がれていると言える。このことは大阪外国語大学についても言えるようである。

全体では、卒業生総数三、〇一八名中、大学などの教職に就いた者は四二五名（一四・一パーセント）で、そのうち男子は卒業生二、二六七名中三六六名（一六・一パーセント）、女子は七五一名中五九名（七・九パーセント）である。なお、女性の学者、研究者の先駆的役割を果たした卒業生として、特に一九五五（昭和三十）年卒の佐藤（千田）洋子、一九五七（昭和三十二）年卒の菊池（鈴木）雅子の名前を挙げるべきであろう（共にドイツ語研究者）。